月刊ナイトバグ　ホーリーナイトバグストーム型リグルのマガジン

NIGHTBUG

2011年 1月号

あわてんぼうのサンタとトナカイと虫と諸々

クリスマス特集

読切り作品

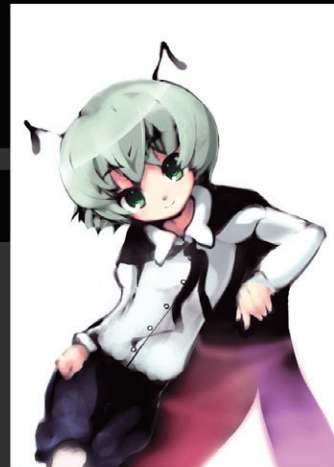
SS　:くろと
漫画:ADDA/13/Step/キッカ/草加あおい

連載作品

SS　:Salka/悠奈
漫画:クロツク

月刊ナイトバグ　2011年1月号

Cover design　小崎

目次 (3p)

1月号テーマ

クリスマス特集

『すすだらけ』　でかすだちん

初めまして、でかすだちんと言います。
こんな可愛い子が男の子のはずない!

『慧音に頼まれてプレゼントを配ってるんだぜ』　貴キ

「何で蟲にまで配らないといけないのかしら」
「でも妖怪の中ではいい子にしてた方だと思うぜ」

『 夜更け過ぎの雪の日に 』　蛍光流動

プレゼントを持ってリグルに会いに行きませんか。

『Merry X-mas』　IDEA(GAGrim)

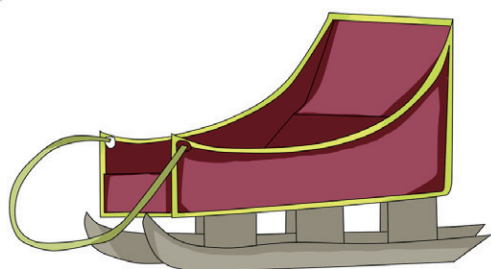
※コメントはありません

Merry X'mas!!

『サンタりぐるん』　やにたま

「またミスティアにこんな格好させられた・・・、というか寒いんだけどコレ（汗）」
・・・こんなサンタが家に来たらそれだけでプレゼントですがな！（w

『リア充爆発強化月間』　残虐非道の貴公子

すっごくネタ被りしてるだろうなぁとガクブルしながら描きました

『ソリがあったよ』　怒羅悪

こんばんわ、どらおです。
唐突ですが、冬コミに今回初めて参加致します。多分グダグダしてる４コマがあるかと思います。
よかったら二日目S02a「謎の輪」までお越しくださいませ。それでは、失礼しました。

『赤顔のトナカイ』　斑

顔が赤いのにもそれぞれ色々理由があるんでしょう。
このトナカイ達を御して、リグルはプレゼントを配る事が出来るのか!?

ブルッ
ヒュオォ…
ん

雪か…
ギィ…
雪かきするくらいまで積もらなければいいけど…

ん？
ボフッ

何の音だろう？
ガラッ

リグルッ!?

おいっ！
しっかりしろっ!!

あれ、
小町さん？

お久し
振りです…

その船に
乗るんですか？

行くなっ！
リグルぅ～っ!!

パチ
パチ…

ほら、白湯だけど
暖まるぞ

ありがとう
ございます…

で、この雪の中、夜も遅くに
寒さに弱いあんたが
何で竹林で倒れていたんだい？

今日は里の寺子屋で
くりすますぱーてぃーって
いうのをやるからって
チルノちゃんに冬眠中を
叩き起こされたんだけど

また
お前か
し

慧音先生が少し様子がおかしくて…
きっと妹紅さんが居ないからだと思って
呼びに来たんだけど…
迷っているうちに夜になっちゃって…

そっか、わざわざ
ありがとうね

えへへ…

妹紅！
メリークリスマスだっ!!

ガラッ

寺子屋のパーティも良いが
やはり二人きりで…

ワクワクして
寺子屋パーティが
少しおろそかに
なったのは
ナイショだぞ！

…

すまない
邪魔したな

ピシャンッ

誤解
ですだっ
!!

二人揃ってダッシュで
説明に行きましたとさ

夏真っ盛り
私もバテそうです

あぢー

ところでリグルさん
ここ最近面白い話はありませんでした？

不思議な話なら

ウム

あるわ

流石リグルさん
非日常といえば
貴女です！

クリスマスが嫌で
夏だと思い込んでる
天狗がいる

アルゴリグル

マジっすか

なんか私っぽいですね…

え、うん

アンタよ

共通意見

そろそろクリスマスね

♪ TN TN ♪

じゃ、今度のトナカイは誰？

・・・

にやり

TN

わーい

やっぱリグルドルフ！

なのか

なぜわたしか！

TN TN

みんなのX-MASよ

こんなかわいい子が

女の子だろ

幸せなルドルフ

キャッチ！

年末だし

あ～゛
ぽかぽか
ぽかぽか
zzz…
お風呂なのか～
ねえねえリグル
新年の願いは決めたの？
ボロボロになった
zzz…
もっと少し
女らしい…
…体に
なんねんめなのか？
面倒くせー
少し？

アイスパット

あたいに任せてよ
良い考えがあるんだから
きゃっ！？
えれっ！？
冷たい！冷たい！
かんじちゃうじゃなくて！？
らめぇ♡
ひやっ♡
あうっ♡
きゃん
たたくな！？
とん！
とん
パットなのか
すごく大きくなったが堅いね
END

クリスマスお空

キッカ

リグルー
クリスマスって
何ー？

えーっと、
お祭…だっけ

へー、
何のお祭なの？

むむむ…

？

●●●●●

アリスー

ーってとこかしらね

なるほどー

…デタラメ教えて
からかうって
どうかしら？

そんな子供みたいな…

お祭なら、さとりさまも
喜んでくれるかなぁ？

にぱー

ごめん、
私が悪かった

純粋すぎる…

で、クリスマスって何がいるの？
えーっと
ケーキと
プレゼントと
ツリーね
結局デタラメ……ていうか苦しいよそれ
まぁ
ありがとー
あの子が楽しめればそれでいいのよね
あ、ツリーあのままだ
!?
ま、まぁいいんじゃないかしらね
えー
つりざお？

東方茶湾虫

クロツク

妖怪のみなさん
稗田阿求あいうえお教室に
ようこそ

今日はクリスマスに
サンタさんにお手紙を
出すことを目標に
文字を教えていきますので

禁書目

頑張って
願いを叶えてもらいましょう

サンタとか…
いくつだてめぇ

Die

こら大ちゃん！いきなり
つっかかるんじゃないの！

虫のお姉(笑)たん
中ボス同士
がんばりまちょう

しれっ

う…あー
えっ？！

よし！なめんなよ
このガキ！

♪葉っぱじゃないよ
カエルだよ♪

あっきゅん全然
おぼえてないよねっ！？

「アメンボ赤いな
あいうえお」
はい、リグルちゃん
あ、あめんぼ
あかいなあいうえお…
次はキスメちゃん

あこぎであくどい
悪虫リグル
おいこら！

あくまであかるく
アカトンボすり潰す
こえぇ！
リグル
あとから
つけんな！

アス×キラは
あたしのフリーダムな
ジャスティス！
お前もかっ
あとなんか
臭そうな花咲いてる!?

「宇宙の海で運動会
円盤遠足絵の具で
絵日記」
メリーさんのスケベ
うちうのうみで
うんどうかい…えんばん
なんちゃらなんちゃら
じゃあ大ちゃん！

うっせぇ　うざい
うすらハゲのリグル
なんだとっ!?
今なんつった!?
リグル
もっかい言うな！
泣くぞ！

コアラのマーチをまぶたに
つめて視界を奪ったところで
炊飯器に詰め込んで炊く
もうそれ
関係ないよねっ!?
リグルを
させるかっ！

後ろから抱きしめられ耳元で
囁くキラ。一度は腕をふりほどこう
とするがすぐにアスランは身を
まかせ本能のなすがまま
きゅうりがぱぱ――
腐の花育ってる!?
あとさっきの
試そうとするなっ！
そー…

さぁ、文字を覚えたところでさっそく
サンタさんへの手紙に欲しいものを書いてね！
↑新品

ああ、大ちゃんらしいというか…
キスメちゃんどういうこと!?

リグルちゃんは？
うあっ!?見えたっ!?見ないでっ!?
ボッ
燃やさなくてもっ!?

せつねぇ…

結局なにもできないままクリスマスがきてしまった…
大ちゃんああ言ってたけど……サンタさん……来てくれるかなぁ……
私独り言多ッ！さみしっ！

スルスルスル
ZZZ

…ふんっ
こんなことのために字を覚えたんじゃないんでちからね……
めりすまま
リグル

よろこんでくれるかかな？

東方郵便娘

～紅い館と、赤い配達人～

著者：Salka

「はい、それじゃよろしくね」

　生地の良さそうな薄手の手袋に握られた袋の口。ガサッ、という紙特有の音が中から聞こえる。

　郵便屋、リグル・ナイトバグがそれを受け取ると、手袋は次に一枚の紙を小さな緑の瞳の前に差し出した。

「リストをお渡ししておきますわ」

　リストに書かれていたのは、袋の中身――手紙を配達する宛先が書かれている。宛先を見れば、博麗神社、白玉楼、魔法の森の魔理沙、アリス両宅などと名の知られた人妖の所在地も連なっている。

「ありがとうございます、咲夜さん」

　リグルはぺこりと頭を下げ、リストも受け取る。直接差出人の下へ集配に来ただけとはいえ普通の郵便サービスの仕事なのだが、その顔は些か緊張している。というのも、目の前の相手は、いつぞやの夜の異変で出会ったひとりだったからだ。

　もちろん、袋の中身は大量の手紙である。差出人名義は、手渡した本人「十六夜咲夜」ではなく、彼女の主「レミリア・スカーレット」、今リグルが集配に訪れている、紅魔館の主だ。

　して、その中身は……それはリグルと咲夜のまわりを見渡すだけでわかる。

　派手に飾り付けられた樅の木、天井のあちこちから吊り下げられたオーナメント、エントランスを飾るカーテンは端に白いファーをあしらった紅いビロードに替えられている。

　クリスマスが今年もやって来る。

　元々紫なのかレミリアなのか、誰かが外界から持ち込んだ行事だそうだが（詳しくは誰も知らない）、毎年紅魔館ではこの行事を祝うパーティーが行われていた。昨年までは身内や知り合いだけで祝っていたそうだが、レミリアが郵便サービスの存在を知り、もっと色々な人妖に招待状を出して盛大に祝おうと考えたのだ。

　ちなみにレミリア曰く、「聖人を祝う行事に私がパーティーを開くのはおかしいですって？　別に目的なんか関係ないわ、楽しければそれでいいのよ」とのことだそうだ。

　招待状を受け取ったリグルは、咲夜に見送られて館を出た。ちょうど、花壇の手入れを終えた門番の紅美鈴を鉢合わせになる。

「あ、美鈴さん。こんにちは」

　友人が住む湖が近いこともあり、リグルと友人たちでよくここの門の前に遊びに来ては美鈴に相手をしてもらっていた。度が過ぎると上司の咲夜に怒られるそうだが、いつも自分達が飽きるまで遊び相手になってくれている。

「それってパーティーの招待状……今日はお仕事なんですね。いつもご苦労様」

「美鈴さんこそ、こんなに寒いのにご苦労様です」

　美鈴は、いつもの服に軽めのコートしか着用していない。寒そうではあるが、非常時に

動きやすいので仕方が無いそうだ。
　ついでに興味を持ったリグルは、美鈴にある質問をしてみた。
「美鈴さんはパーティーに出るんですか？」
「私ですか？　門番の仕事はありませんね、だって博麗の巫女や魔法使いまでいる紅魔館に、わざわざ乗り込んでくる人なんていないでしょう？　ただ、今年は特別に、お嬢様からある命令を受けまして」
「ある命令？」
　リグルが復唱する。すると美鈴は、
「ごめんなさいね、リグルにも内緒なんです」
　といって、人差し指を唇にあてた。
「そうなんですか。大変ですね……。じゃ、私はここで。また遊んで下さいね」
「ええ、いつでもお待ちしてますよ」
　美鈴に笑顔で見送られ、リグルは館を後にした。
　彼女たちが話に花を咲かせている間に、上空を通り過ぎた影に気付くことなく。

＊

　人里、寺子屋の隣。ここが郵便サービスの拠点である。
　リグルは早速、同じ方面の招待状をまとめながら、確認作業に入る。確認といっても中身を見るわけではなく、インクが滲んだり敗れたり、それで宛先が見難くなっていないかを軽く確認するだけだ。軽く目を通した手紙を、リスト通りに分けていく。
「ん？」
　ふと、リグルはその中に一通、明らかに他の招待状とは違う封筒の手紙を発見した。しかも切手も貼られていない。
　普通、こういった不備のある手紙に関しては、差出人が分かるものは差出人に返却、分からないものは処分する決まりになっている。この場合は紅魔館で受け取った手紙なのは明らかなので、咲夜に返せばいいだけだ。
　しかし、あの咲夜が別の手紙を間違えてくれるようには見えない。美鈴からも以前完璧な仕事ぶりを聞いていただけに、違和感が残る。
　と、そこへ。
「よーっす、リグル。いるか？」
　ノックもせずに入ってきたのは、普通の魔法使い、霧雨魔理沙だ。お荷物そうな袋を見れば、どこに行ったのか一目瞭然だ。
「なんでもパーティーの招待状を配達するらしいな。大変だろ？　私で良かったら手伝うぜ。知り合いも結構いるしよ」
　何故知っているのかはともかく、リグルにしてみれば願っても無い増援だった。いくら行ったことがあったり、知っている場所だったりするところがあっても量が量だ。通常の配達もあったので骨が折れる仕事になるとは思っていた。そして霧雨魔理沙には多方面に知り合いが多い。彼女なら大概のところに配達に行けることだろう。
「ほんとう！？　有難う魔理沙！」
「そんじゃ、リストを……そりゃ何だ？」
　言うなり魔理沙は、リグルが手に持っていた、招待状らしからぬ手紙を勝手に奪う。手癖の悪さはいつものことだ。
「招待状じゃないみたいだな、どれどれ……」
「ちょっと魔理沙！」
　勝手に中身を取り出し読もうとする魔理沙にリグルは慌てて声をかける。本業のリグルは、顧客のプライバシーを重視するようにという慧音の教えに忠実になっていたからだ。
　対して魔理沙は、
「ばっか、封筒に何も書かれてないんなら、中身を見るのがその手紙を知るのに手っ取り早いだろ？」
　彼女なりの理屈を通してついに手紙を返してはくれなかった。
「お？」
　と、目を通した魔理沙の表情が変わる。何か珍しいキノコを見つけた時のそれに近い。
「ははーん……リグル、これを見ろ。つべこべ言わずにだ」
　言われてリグルは手紙を見る。
――サンタさんへ
　お姉様の言いつけどおり、ちゃんと一年間い

い子にしてました。だから楽しいお友達とおもちゃが欲しいです
フランドール

「フランドールは知ってるか？　風の噂で名前くらいは聞いたことあると思うんだけどな」
「うーん、私そんなに記憶力よくないから、わかんないけど。それで？」
　思い出そうとするが出てこない。頭が多少弱いリグルは、基本直接会った人以外のことはあまり覚えられないのだ。
「こいつはな、お前に招待状を託した紅魔館の主レミリア・スカーレットの、妹だ」
　魔理沙は「妹だ」を特に強調して言った。
「妹？　美鈴さんからもそんな話聞いたことないよ」
　というより美鈴とはあまり内部の話をする機会がないだけなのだが、それにしてリグルにとっては初耳である。
「そりゃそうだろうな。あそこに詳しく立ち入ったことのある人じゃないとまず気付かない。何せこのフランドール、ちょっとした事情でほぼ地下室から出してもらえないからな」
「えっ……」
　紅魔館とはあまり関わりがないリグルには「事情」というのは分からないが、ずっと地下室に閉じ込められる生活というのを想像してぞっとする思いだった。
「最近は館の中なら割と自由に行動できるらしいからな、隙をついてこれを忍ばせたんだろう。サンタさん宛の、この手紙を。誰の入れ知恵かは知らんが、粋なことをするじゃないか」
　そう言って魔理沙は手紙をひらひらと手で遊ばせる。
「でも、このサンタさんって……」
　サンタクロース、通称サンタさん。リグルは以前冬妖怪レティからその話を聞いた事がある。クリスマスの夜に赤い服の人間が、一年間いい子にしていた子供の靴下に、その子が欲しいものをプレゼントとして入れてくれる、という伝承だ。しかし幻想郷にサンタさんがいたかどうかはリグルには分からない。
「私にしても未確認だな。なんでも架空の人物って話もあるらしいじゃないか」
　確かに、子供の欲しいものを何でも与えられる能力がある人間なら、普通注目されてもおかしくない。ある意味では近い人物に、夏に出会った赤服女こと岡崎夢美もいたが、そもそも外界の人物なので連絡も取れない。
「じゃあ、この手紙はどうすれば……」
　そう、宛先が不明瞭なもので、どう取り扱えばいいか分からないのだ。
　二人で暫く考え込む。そこで魔理沙が、ふと何かをひらめいたように手を叩いた。
「そうだリグル、ギブアンドテイクだ。私はお前を手伝うことにした、だからお前に私を手伝う権利をやろう」
「は？」
　相変わらず強引な筋の理論である。
「なに、サンタクロースといえばクリスマスの主役だろう、私とお前で、出席するかも分からん主役の座を乗っ取ってやろうというわけだ」
　魔理沙は白い歯をくっきりと見せ、にっと笑った。

＊

「ほら、これ」
　一面真っ白な湖のほとりに作られたかまくらの中。野良妖怪には不釣合いな立派な作りの封筒を、リグルは人数分手渡した。
「紅魔館からパーティーの案内だってさ。咲夜さんが『友達がいたら誘っていいから』って余分にくれたの」
「面白そうね」
「おいしいご飯が食べられるかな？」
　パーティーと聞いてチルノとルーミアの目が輝きだす。隣で橙が「素直だねー」と苦笑いをしていた。その橙には彼女以外に主人とその主人の分の招待状が渡される。一旦チルノ達を向いた橙は、しかし首元が開いて寒気が入り、すぐに首を引っ込めて暖炉（といっ

ても簡単に火元と覆いを作っただけのものだが）と睨めっこに戻ってしまった。
「楽しそうな話をしていると思ったら」
　と、そこにリグル達よりも一回り年上そうな女性が入ってくる。入った途端にかまくらの中の温度が少し下がり、リグルと橙がぶるっと震えた。
　寒気を操る冬の妖怪、レティである。
「ふふ、表に面白いものを作っておいたわよ。よかったら後で見にいらっしゃいな」
「あ、レティもこれ」
　表で作業をしていたらしく、レティは泥汚れが僅かに付着した手袋をつけていた。手袋を外したところで、リグルが招待状を手渡す。
「お誘いは嬉しいけれど、私が来たら大変じゃないかしら。料理が冷めるなんて言われて、メイドさんから怒られちゃいそうだわ」
「でも……」
「いいのよ。それよりも他のお友達を誘うといいわ」
　冬にしか出ないくせ、寒気を増幅させてしまうため、普通の妖怪からは避けられるレティ。今や友好的な人妖が多いリグルの評判を落とすわけにもいくまいと考えたのか、頑なに参加を断り続ける。
　その時ふと、リグルの脳裏にあの手紙の文面が浮かんだ。「お友達がほしい」……なんらかの事情があるとはいえ、ろくに遊べる友達がいない孤独な吸血鬼。そして今目の前にいるのは、その性質が故に人々から避けられ、みんなで楽しむはずのパーティーに無粋の烙印を押されかねないと遠慮している雪女。
「……だめだよ。フランドールだってレティだって、そんなまわりの勝手な都合でひとりぼっちになるのはおかしいよ。私、咲夜さんにかけあってみる。レティが嫌われ者でいいはずないって証明するよ！」
「あたいも行く！」
「私もー」
　リグルの熱弁にチルノ、ミスティアも同調する。すると橙、ルーミア、大妖精も動き、皆でレティの服裾をつかんで懇願し始めた。
「一緒に行こうよ、レティ！」
「……そうね、分かったわ。でも怖ーい吸血鬼さんに怒られそうになったら、素直に引き下がるのよ」
　遂にレティも折れる。そうと決まれば行動に出るのは早い子供達。暖炉の火を消して上着を羽織り、紅魔館へ出発する。
　真っ先に表に出たチルノがあっと声を上げた。
「きれーい！」
　そこにはレティが作ってくれた、簡単ではあるがクリスマスツリーの氷像があった。

＊

　紅魔館当主にして近日開催されるパーティーの主催、レミリア・スカーレットはご機嫌であった。クリスマスパーティーに、当初の予定にはなかった余興が加わったからだ。
　遡ること数刻、部屋で紅茶を飲みながらパーティーのスケジュールを確認していた時だ。突然、ノックの音と共に咲夜が入ってきた。
「お嬢様、パーティーの件でご相談が」
「あら、何かしら」
「実は、余興をもうひとつ任せるかわりにパーティーに参加させて欲しいという者が来ておりまして。先日招待状の集配に来た郵便屋の友人なのだそうです」
　郵便屋、と聞いてレミリアの表情が僅かに動く。
「いいわ、連れていらっしゃい」
　暫くして、郵便屋とその友人らしき一団を連れた咲夜が戻って来た。咲夜に下がらせると、レミリアはリグルに訊ねた。
「それで、どうやって楽しませてもらえるのかしら？」
　リグルの話を聞いたレミリアは、満足そうな表情を浮かべてそれを請けることにした。そうして今に至る。
「これは、忘れられないクリスマスになりそ

うだわ。私にとっても、あの子にとっても」
　彼女以外誰もいない部屋で、レミリアはひとり、呟いた。

＊

パーティー前日。仕事を終えたリグルは、「迎えを寄越す」という魔理沙の伝言に従い郵便局の前で待っていた。恐らく例のクリスマス大作戦についてだろうが、しかし迎えを寄越すとは一体何事だろうか。
と考えていると、向こうのほうから明らかにこちらに向かってきているような人影が見えた。リグルはその人を知っている。
「アリス」
「こんにちは」
　向かってきたのは金髪碧眼で白い肌の、西洋人形を思わせる美少女。魔理沙と一緒に夜の異変でやってきた、アリス・マーガトロイドである。たまに人里で人形劇を開くので、仲良しというわけではないが顔見知り程度ではある。
「アリスが、魔理沙の言ってた『迎え』？」
「ええそうよ。どうしても自分じゃ迎えに行けないから、私を寄越したの。行きましょう」
　アリスに連れられて向かったのは魔法の森の――何故かアリス宅。
アリスがドアを七回ノック（どうやら合言葉的な意味があるらしい）すると、ドアが少しだけ開き、魔理沙が顔だけをのぞかせた。
　魔理沙は二人の姿を確認し、ドアを開いて中に招き入れると、急ぎドアを閉める。初め不審に思っていたリグルだったが、入って魔理沙の姿を確認してようやくその理由が分かった。
　魔理沙は上下とも下着姿だったのだ。
「いやー、洗濯を忘れちまってよ、洗い上がりがこの一着しかねぇんだ」
　呑気に魔理沙がそう言って指差した先には、魔方陣の上に置かれたいつものエプロンドレスと黒いとんがり帽子。
「まぁ見てろって。じゃあ、頼むぜアリス」
「ええ」
　アリスが何か唱え始めると、魔方陣がきらきらと輝きだした。思わず見惚れるリグルの肩を、魔理沙がいきなり引く。
「近付くなよ。あれの中に入ると真っ赤かになっちまうぜ」
　と言いながら、何故か魔理沙はリグルの制服の上着を脱がせ始める。
「ちょ、魔理沙……！」
　止めようとしたが既に遅し。リグルのベストは魔理沙の手に渡り、しかもそのまま魔方陣の中に、
「そぉい！」
　されてしまった。
「あぁぁぁぁ！？」
　徐々に赤く染まっていくベストを見ながら、リグル、絶叫。
「ちょっとそれ夢美からのもらい物なのよ！　何てことするの！」
「なに、二日三日で元に戻るさ。しょうがねーだろ。アリスに服作ってくれって頼んだら、『パーティーの人形劇の仕込みで忙しいから』って断られたんだしよ。それに送り主があいつならおそろいじゃないか」
　全く反省の色がない魔理沙に、リグルも、ついでにアリスも呆れ顔だった。アリスにしたって、この忙しくてたまらない時に迎えまで頼まれて大変だったのだろう。赤く染まった服を押し付けるように魔理沙に渡すと、
「ほら、私だって暇じゃないのよ。終わったらさっさと出て行ってちょうだい」
　追い出す姿勢に。
「ちぇ」
　魔理沙は不満げな目を向けながらも、手早く赤いエプロンドレスを着込み、リグルを連れてアリス宅を後にした。
「全く、仕事に追われる女はおっかないぜ」

＊

クリスマスイヴ、紅魔館主催のパーティー当日の朝。
　壁に掛けてある制服――魔理沙のせいで無理矢理赤色に染められたベストを見て、リグルは今までのことが夢でないことを改めて感じた。夢だとしてもそれはそれで悪夢だが。
　実際、リグルにとってこの日の夜に決行される作戦は、かなりの大冒険である。地下室暮らしを余儀なくされるような人物に、紛い物とはいえ手紙の受取人として、依頼の請負人として会いに行くのだ。現実離れしていて、まるで地に足がつかないように気持ちがフワフワ漂って落ち着かない。
　リグルは緊張しい自分を抑え、いつも通りに顔を洗い食事を済ませて制服に着替えた。

＊

　いつものように郵便局で配達物をチェックし、配達と集配にまわる。いつもと色がガラリと変わった制服のことも度々訊かれたが、リグルはその度苦笑いで誤魔化した。
　そしてその制服を染めた張本人、霧雨魔理沙は、仕事を終えたリグルを郵便局で待っていた。「黒白魔女」の通称が表す黒い魔女っ子エプロンドレスと帽子は今日は真っ赤で、サンタクロースのようだ。
「よぉ」
　リグルの姿を確認すると、軽く右手を挙げて挨拶する。
「疲れただろ？　アリスからキャラメルの差し入れがあるぜ」
　力が抜けたリグルの表情を見、魔理沙はそう言って懐から紙包みを取り出した。ほんのりと甘い香りが広がる。
「ありがとう魔理沙。アリスもこんな忙しい時にここまでしてくれるなんて」
「気にすんな」
　キャラメルを口に放り込むと、先ほど鼻をくすぐった香りが口の中で広がる。ほんのりとした甘さが疲れをふっと忘れさせた。
「寒いから中に入ろうぜ、そこで今夜行う作戦について説明する」
　そんな魔理沙の表情は、さながら宝を求めて未開の地へ飛び出す冒険者のよう。待ち受ける展開を想像してワクワクしているようだ。
　魔理沙を中に招き入れ扉を閉めると、机の上に地図が広げられた。魔理沙の手書きらしく、かなり雑な図面と字が躍っている。
「一晩で書いたからかなり雑だが、これが紅魔館の全体図だ。お前が会いに行くフランドールはここの地下室にいる。ただ、パーティーの招待客として行くとなるとまずここには行かせてもらえないだろうな。だから侵入するしかない。地下室までは、こっちの図書館近くを通れば問題ない……いやあったな。そこでだ」
　説明を一旦区切り、腰に下げた巾着を漁る魔理沙。するとそこから、なにやら奇妙なキノコが飛び出す。途端、反射的にリグルは鼻をつまんだ。
「何これ！　くっさ〜い！」
　そう、取り出したキノコはとんでもない臭いを発していたのだ。机を挟んで向かいにいるリグルが反射的に鼻をつまむほど、取り出した本人が咳き込みながら慌てて鼻をつまむほどに。魔理沙はそれを袋に戻し、説明を続けた。恐らく袋には何らかの魔法が使われており、それで臭いを防いでいるのだ。
「図書館付近もだが、紅魔館内部には妖精メイドが沢山いる。パーティーの最後の準備ってことで相当ピリピリしているだろうな。さすがに戦闘は避けたいだろ？　だからこれを出して走ればいい。こいつの臭いでみんな近寄りたがらないぜ」
　なるほどそういうことか。リグルは目尻に浮かんだ小さな涙を拭い、巾着を見つめた。
「そして図書館の主にパチュリーって紫髪のか弱そうな魔女がいるんだが、こいつも厄介だ。まず実力じゃお前は勝てない。だが勝機はあるぜ。あいつは喘息持ちなんだ。こいつを投げつけてやればまともに呼吸できないだろう」
「ちょ、ちょっとそれパチュリーって人を殺す気！？」

「安心しろ、あいつには司書であり小間使いの小悪魔がついてる。パチュリーが咳き込んでいればそいつも介抱せざるを得ない、その隙に逃げるんだ」
　魔理沙の説明を頷きながら聞いていたリグルだったが、説明が終わってふと疑問が浮かぶ。
「あれ？　ちょっと待って魔理沙。魔理沙はこんなに紅魔館について詳しいじゃない。それにフランドールのことも知ってるみたいだし。だったら魔理沙が行けばいいじゃない。美鈴さんに聞いたけど、魔理沙はよく紅魔館に忍び込んでるんでしょ？」
　こんなややこしい説明、こんなややこしい方法でまでリグルが侵入することがあるのだろうか。魔理沙はリグルよりもはるかに強く、ずる賢い。明らかに侵入作戦に向いているのは彼女のほうなのだ。
　しかし魔理沙は、その質問すら予め想定済みだったかのように胸を張り、答えた。
「いくら私でも、妖精メイド全員とメイド長やら何やらかんやらを一気に相手するのは難しいんだぜ？　私の役目は別にある」
　そして魔理沙は、正門のところに指を突きつける。
「表で騒ぎを起こして、お前が入り込みやすいようにする。いわば陽動作戦だ」
　そこまで説明すると、魔理沙はサンタ帽と袋をリグルに差し出した。
「サンタさんは人間だからな、コイツを被って触角を隠すといい。それとこの中にはフランの欲しがってた『おもちゃ』が入ってる。この前、妖怪の山まで招待状を持っていくついでににとりに頼んで作ってもらったちょっとしたカラクリだ。フランに会ったらこいつを渡してくれ」
「うん」
　リグルは袋と帽子、そしてキノコ入りの巾着を受け取り、強く頷いた。

＊

「じゃあな、頼んだぜ」
　魔理沙と共に紅魔館付近まで行くと、一旦そこで二人は別れた。リグルは裏手にまわる前に、湖の近くに立ち寄る。レティが作ってくれた氷のツリーは、木の実などで飾り付けられている。
「チルノ」
　その近くで雪だるまを作っていた友人に声を掛ける。
「あ、リグル。どう？　あたいの自信作」
「え？　ああ、いいんじゃない？」
「はっきりしない奴」
　雪だるまのことなど頭になかったリグルは、いい加減な感想をつけてしまった。
「あら、リグルじゃない」
　そこにレティも現れる。ちょうど話に都合のいい人物が来たので、リグルは本来の話を持ち出した。
「レティ、悪いけどパーティーは私、一緒に行けなくなっちゃった。みんなのことお願いしていい？」
「あら、それは残念。でもあなた最近は人気者だから仕方ないわね。大丈夫よ、皆のことは私に任せて」
　レティはリグルが考えていることがある程度分かっているらしく、優しい笑顔で答えてくれた。その返事を聞いてリグルもほっとする。
　さて、もう時間がない。魔理沙のためにも行かなければ。リグルは軽く挨拶をかわすと、すぐに紅魔館の裏手へと向かって行った。

＊

　リグルが裏手から侵入した時には、既に表で魔理沙が騒ぎを起こしているらしく警備は手薄、妖精メイドたちも異臭を放つキノコを手にしたリグルを相手している場合ではなさそうであった。

お陰で思った以上にすんなり道が開く。目的の地下室まで障害があるとすれば、前方に見える図書館。直接前は通らなくとも、恐らく騒ぎを聞きつけた魔女が駆けつけないとも限らず、
「魔理沙が表で騒ぎを起こすなんておかしいと思ったのよ。こういうことね」
　予想通り現れた魔女、紫の髪に気だるそうな表情、左手に魔道書、右手に魔力。間違いない、彼女がパチュリー・ノーレッジだ。
「どういうつもりかは知らないけれど、レミィのパーティーを台無しにするなら帰って欲しいところね」
　有無を言わさずパチュリーは魔法を放つ。なんとか避けながらリグルは、魔理沙に言われたアレを実行した。
「ご、ごめんなさい！」
　詫びの言葉と共に、キノコをパチュリーのいる辺りに投げつける。キノコからあの臭いを放つ胞子が飛び出し、パチュリーは思わず咳き込んだ。
「うぅ……ゲホッゴホッ……く、くさ……ゲホ」
「パチュリー様！」
　騒ぎを聞きつけて駆けつけた小悪魔が、蹲って咳き込むパチュリーを抱き起こす。リグルは何度も心の中で「ごめんなさい」と呟きながら、足早にその場を去っていった。
　とりあえず関門は通り過ぎた。後は地下室に向かうだけ。
　そう思っていたリグルの背後から、慌しい足音。
「いたわ、こっちよ！」
　妖精メイドのひとりが叫ぶ。大量の足音が、それを合図に追いかけてきたのだ。
　地下室へ向かう道の方向からも足音が聞こえる。リグルはとにかく全部の感覚を研ぎ澄ませ、足音の無いほうに、無いほうに逃げ回った。
「逃がしちゃダメよ、魔理沙共々捕まえてレミィの前に突き出してやりなさい！」
　パチュリーの声まで聞こえてきた。リグルの顔がどんどん青ざめていく。もう自分がどこにいるのかすら分からない。
　無我夢中で逃げたリグルは、脇の道に黒い幕がかかっているのを発見した。まだ足音は遠い――行ける。
　隠れてやり過ごせばまだいける。それだけを考えながら、リグルはその幕へ飛び込む。

――ドンッ

　飛びこんだ真っ暗な空間で、リグルは何かにぶつかった。
「いたっ！」「きゃ！」
　ぶつかった拍子に声が出て、一瞬、全身が震える。同時にぶつかった相手からも声が聞こえてきた。「何か」にぶつかったわけではなく、「誰か」にぶつかったようだ。これが妖精メイドだったらリグルの命運は尽きたもの――だが、向こうからリグルに何かしてくる気配はない。
　恐る恐る。リグルはカードを取り出し、蛍の光を喚び出した。暗闇に拙い明かりが灯る。そこにぼんやりと映ったのは、年のあまり変わらなさそうな幼い少女だった。少女はある程度目が効いているのか、リグルをじっと見つめている。
　きょとんとしながら見つめてくる少女、帽子はレミリアのものと似ており、背には七色に光る結晶のついた羽、病的なまでに白い肌に紅い眼がよく映える彼女に、リグルの中であることがひらめく。
「あなた、もしかしてフランドール・スカーレット？」
　あどけない手紙の字が、少女の姿と直結する――少女の答えは。
「そうよ。そういうあんたは誰？」
　答えると同時に問い返された。リグルはすぐに「私はリ……」まで言いかけ、慌ててその言葉を飲み込んだ。
　そう、今のリグルは……
「私は……そう、サンタクロース！　あなたの手紙を読んでここまで来たの！」
　と、まぁ自信満々で言ってしまったリグルだが、対してフランドールの目は何故か懐疑的だ。そしてその視線は、リグルの「ある一点」に注がれている。

「あんたが？　……へぇ、サンタクロースは赤い服の人間って聞いていたけど、その頭のぴこぴこしてる触角、あんた妖怪じゃないの？」
　言われてリグルは、自分の頭がやけにスースーしていることに気付く。魔理沙から借りたサンタ帽がない。どうやら先ほどのゴタゴタのうちに落としてしまったらしい。
「えーっと、その、そう！　色々あってサンタクロースなの！」
「ふぅん……ま、いいや」
　咄嗟に誤魔化した嘘だが、フランドールはとりあえず信じてくれたようだ。
「ところで、あなたはどうしてここに？　人から聞いた話だと、あなたは地下室にいるはずだったけれど」
　思いがけずこんなところで目的の人物に会うことができたリグルだが、本来なら目的地は地下のはず。それも出してもらえない身分だとしたら、誰かにでも連れてこられたのだろうか。
　しかししてフランドールからの返答は、そんなリグルの予想の斜め上を行った。
「お姉様から、美鈴が来るまで大人しく待ってなさいって言われたのよ。だけどいつまで経っても美鈴は来ないし、上から凄い慌しい足音が聞こえてくるし、気になって出ようとしたらカギが開いてたの。それで出て歩いていたら妖精メイドに見つかって、お姉様にバレたらまずいと思ってそいつを気絶させてここに隠れてたわけ」
「なるほど……」
　と、リグルが答えてから会話が途絶える。
静寂が訪れて、リグルははっと気付いた。あの妖精メイドやパチュリーが追いかけてくる嵐のような音はすっかり消え、どこか遠くからだろうか、人のざわめきが聞こえる。そういえばもうパーティーの始まる頃だろうか、友達はもう着いたのか、そういえばフランドールはパーティーに参加するのか、とリグルはそんな事を考えながら目の前の彼女を見遣った。
　友達が欲しいです。たったその一言に、リグルは彼女がどんな寂しい生活を送っていたのかと思いを馳せてしまう。吸血鬼は見た目よりはるかに長命とはいえ、見た目の幼さはやはりリグル自身と同じ遊びたい盛りを思わせる。できるなら自分が友達になりたい、リグルは心の中でそう思っていた。
「……待てよ」
　思った瞬間に、リグルの中で思考の玉が弾けた。何か引っ掛かることがあったと思えば……。

　リグルはやっと理解した。

　フランドールと知り合いの魔理沙が、どうしてもリグルに行かせたかったその理由――この作戦に込められた、本当の意味と目的を。
　ごくり。生唾を飲み込み、リグルは改めてフランドールと向き合う。
「フランドール。私からあなたに、プレゼントがあるの」
　今宵だけのサンタクロースが、その目的を果たす時。リグルは魔理沙から預かっていた袋からカラクリを取り出した。
「まず『オモチャ』……これね。このネジを巻いたら色々変な動きをしてくれるカラクリなの」
「へぇ、面白そう」
　手渡されたカラクリをまじまじと眺めるフランドール。とりあえずオモチャのほうは満足だったようだ。
「それから……」
　リグルが本題に入ろうとした瞬間。

――パチン

　軽快な指を鳴らす音を合図に、ばさ、という布が風に舞う音がして、暗闇に光が差し込む。一瞬眩しくて目を窄めた二人が次に見たのは、会場に集う多くの人妖。それも壇上から見下ろす形でだ。
　どうやら二人は、幕で隠された壇上にいたらしい。

は。
「え、な、何……」
「続けなさい」
　戸惑うリグルに、横からそっと囁いたの
「お姉様？」
　パーティーの主催、レミリアだった。夜の
異変の時でも見せなかった、レティの参加をお願いしに
行った時でも見せなかった、妹思いの姉の視
線が、二人に注がれている。レミリアはフラ
ンドールに一度目配せをすると、リグルに
そっと耳打ちした。
「幕の裏に二人の気配がして使い魔の蝙蝠を
忍ばせて会話を聞いていたのよ。細かい話は
後で。さぁ、続けて」
　見れば、会場の皆の視線がリグル達に注が
れている。完全な注目の的だった。リグルは
完全に舞い上がり、耳まで真っ赤に染まって
いる。高鳴る胸を押さえ、深呼吸し、そして
再度フランドールに向き直り、
「それと、もう一つのプレゼント……その、
あの、わ、私……」
　しどろもどろなリグルに、会場のどこから
か「頑張れ」という声援が飛び出す。
「私でよかったら、友達になろう！　それが
私からのもう一つのプレゼントだよ！」
　言い切った。
「ともだち……」
　思いもよらない言葉に、フランドールは夢
でも見ているかのような上ずった声で復唱し
た。そのフランドールの手を、リグルは両手
でしっかりと握り締める。
「ね、いいかな？」
「……もちろんよ！」
　フランドールの口からその返事が飛び出し
た瞬間、会場からどっと歓声と拍手が沸き起
こった。あちこちからクラッカーも鳴り響
く。
　レミリアが再び指を鳴らすと、妖精メイド
が飛んできてリグルとフランドールの二人に
クリスマス仕様のケープを着せた。
「元より今日はフランを主役に据えるつもり
だったのよ。フランがパチュリーの本に興味
を持って、サンタクロースのためにいい子に
してた、そのご褒美に。だからそれも私とフ
ランの二人で着るつもりだったけれど……い
いわ、今夜は譲ってあげる。フランのお友達、
リグル・ナイトバグにね」
　最後にサンタクロースの正体を思い切り明
かし（姉として主催として、やっぱり悔しかっ
たのだろう）、レミリアはそう説明してくれ
た。
「あらリグル、あんたサンタクロースだなん
て嘘をついてたの？　それに友達ならフラン
ドールなんて面倒な呼び方をしないで、フラ
ンって呼びなさい」
「うぅ、ごめんねフランn」
「こらー！　あたいのリグルを独り占めは許
さないわよ！」
　項垂れたリグルの声を掻き消す大声で、チ
ルノが壇上に乱入する。もちろん後から仲間
達もついてくる。
「リグルと友達になるんなら、あたいたちと
も友達になりなさい！」
「あら、おバカな氷精と仲良しになったら、
スカーレット家の名折れにならないかしら」
「何をぅ！」
「チルノちゃん、冗談だからムキになっちゃ
だめー！」
　照れ隠しの冗談に本気になって怒るチルノ
を、大妖精が必死になって抑える。
と、そこにちょうど魔理沙と美鈴が現れた。
「予定外に嬉しいハプニングが起こったのは
いいんですけど、そのせいで私がとばっちり
を受けちゃいましたよ」
「へへっ、こいつが地下室にフランを迎えに
行くって聞いたから、ちょいと邪魔させても
らったんだ。美鈴やパチュリーにはちょっと
済まなかったが、聖なる夜のヒロイン、マリ
サンタに免じて許してくれると思うぜ」
　相変わらず魔理沙は悪びれる様子もない。
レミリアは軽く魔理沙の頬をつねり、「また
さっきの尋問みたいな目に遭わせてあげよう
かしら？」と脅し文句を添えた。

＊

主役の二人を中心に、豪華な食事と煌びやかな装飾に囲まれた盛大なパーティーは続いた。アリスの人形劇は特に子供を中心に大好評だったし、酔っ払った魔理沙や萃香の一発芸で一転、大爆笑に包まれた。プリズムリバー楽団の演奏で盛り上がり、更に豪華賞品（中には永遠亭特製の怪しい薬なんかもあったが）を賭けてのビンゴ大会では、二人の巫女が残り一枠の競り合いでヒートアップしていた。
様々なイベントと談笑に耽っている間に楽しい時間はあっという間に過ぎ、気がつけば夜もかなり更け込んでいた。といっても参加者は夜型の妖怪も多い。まだまだ元気そうな者は、残った酒をちびりちびり呑んでいる。
「さて、とっておきの余興を見せる時がきた様ね」
手をパンパンと叩き、自身に注目を集めるレミリア。その隣には咲夜と、何故かレティが控えている。
「レティ、準備は整ったかしら？」
「バッチリよ」
レティがウインクする。レミリアは頷くと、エントランスに向かって歩き出した。
「外に出る気力があるなら、ついてきなさい」
酔いつぶれた者や寒さが苦手な者を考慮しての発言だったが、その場にいた全員がレミリアの後についてきた。
「結構」
入り口の扉を開き、来客を外——中庭に招く。パーティー開始前までは無造作に雪が積もっていただけの中庭に、何かあるのか。
初めに中庭に踏み出したのはもちろんリグルとフラン。眼前に広がる光景を前に、二人は圧倒され息を呑んだ。
「うそ……」
「きれい……」
中庭は、レティが造った氷像雪像によって氷雪の楽園が出来上がっていた。月明かりに照らされて、雪の結晶がきらきらと光っている。トナカイがひく橇に乗ったサンタクロースや、クリスマスツリー、たくさんの星や、プレゼント、子供が喜びそうな木馬やトロッコ、雪だるま、他にも様々な像が作ってある。
「ほぇぇ」
「何だこりゃぁ！？」
「すっごーい」
リグル達に続いて中庭に出てきた参加者たちが、次々と感嘆の声を漏らす。
「レティはこんなこともできるんだよ。あたいの自慢の友達なんだから」
いつも疎まれてばかりのレティの汚名を晴らそうと、チルノが鼻高げに躍り出た。もうこれで、誰もレティが寒いだけの嫌な妖怪だなんて言わないだろう。
「フランもレティも、大切なお友達だよ。誰かが嫌ったり避けたりしても、私はそんなことしないもん」
「私も！」
「私だって！」
「もちろん！」
「あたいだってー！」
フランとレティの間にリグルが立ち、二人の手を取る。ルーミアやミスティア、大妖精にチルノたちも飛び込んできて、それぞれがリグルと同じように二人の手を取った。
「へへ、良かったじゃねーか。こんなクリスマス、あと五百年はないぜ」
「バカなこと言わないでよ」
そんな仲良しグループを見て、魔理沙とレミリアは笑うのであった。

＊

後日、パーティー当日の一連の騒動の真相が、魔理沙の口から説明された。それによるとこうだ。
まず、正面から陽動作戦に飛び出した魔理沙は、たまたま中庭にいた美鈴からフランドールを連れ出す役目のことを聞き、全力で阻止することとなった。美鈴はその時マスタースパークを真正面から浴びたそうだが、それについては後から気で治したので問題ないとのこと。
しかし、これがやりすぎだったために咲夜とレミリアが出ることとなり、妖精メイドも

揃って猛攻を受け魔理沙はあえなく御用。レミリアの尋問（思い出したくないぜ、ということなので内容については触れなかった）を受けた魔理沙はフランドールの手紙のこととリグルのサンタ侵入作戦の全容を喋ってしまった。終わったと思った魔理沙だが、レミリアは寧ろそれに加担すると言い出した。なんでも以前パチュリーがフランにサンタクロースについての本を読ませたところ、熱中したフランがサンタクロースにお願いを聞いてもらうために姉の言うことに素直になっていたというのだ。

　そこでレミリアは、二人を主役とするべく、妖精メイドに命じてそれぞれをステージ裏手に導くように追いかけさせた。見事はまったリグルとフランはそこで出会い、後はリグルも覚えているあの展開に至ったわけだ。

「お前のことだからその場限りだと思ってたが、まだ続けてるんだな、友達」

　一通り話し終えた魔理沙は、目ざとくリグルの持っている手紙を見つけた。差出人欄にはフランドール・スカーレットと書かれている。

　パーティーの後、リグルはレミリアに何故フランが地下室に閉じ込められているのかを説明した。心にまだ不安定が残るため、持て余す危険な能力で問題を起こさないためだ、と。

　それを理解した上でまだ友達でいたいというリグルに、レミリアは文通をさせようと提案した。これにはフランも大喜びで、翌日すぐにリグル宛ての手紙がやってきたほどだ。

　机の上で、にとりのカラクリに見守られながら手紙を認めるフランを想像し、リグルは胸がくすぐったくなるような気がした。

　こうして、赤い配達人の紅い館でのクリスマスは、無事に終わったのであった。

《おわり》

【後書き】

　相変わらず時間がありません。予定していたプロットと全然違う展開になった。正直反省していｒ

　多分同人誌になる時には本来考えていたプロットに修正されるので、ちょっと違うサンタクロース大作戦の内容が見てみたい人は楽しみにｓ　いやなんでもないです

　クリスマスということで、昨年のクリスマス特集で投稿したあのリグルが活躍する話はどうだろう、と考えていた時に、フランちゃんがサンタを信じていたらどうだろう、というネタが浮かんでこうなりました。

　レティのくだりに関しては完全に執筆中に入ったのでプロットになかったんですが（先月投稿しようと思っていたプロットがレティメインの話だったので、こっちで出してあげようと思った、ってのもありますが）もう少し絡めてあげたかったなぁ……レティ好きなのですごく残念。

　小傘に続いてフランという新しいお友達が増えましたが、来年はどんな人絡みのどんな事件が起こるのか楽しみです。

　最後に、先月投稿し損ねて言えなかったのですが第六回東方紅楼夢で当スペースに足をお運びいただいた方、本当に有難うございました。こんな個人趣味のオマージュ作品にも関わらず多くの方がお手に取って頂いて、初めて本格的に同人誌作った身として大変感無量で御座います。最近忙しくて滞ってはいますがこのシリーズの執筆も絵のほうもぼちぼち続けていこうと思っておりますので、今後ともどうかよしなに。

大⑨州？　そんなの知らんｙ　嘘です来てくださった方いるか分かりませんがありがとうございました！

東方大寒波

Step

ふぁ〜

あー、よく寝た

ん？

あら、どうしたの？

あ
レティ

なんかリグルの調子悪そうなんだ

寒さが苦手なんだってば

もしかして風邪かしら？

二人が近づいてきたからです

何か私達にできる事がある？

とりあえず離れて下さい

ぞくっ

ズイッ

震えがひどくなったよ！

ズイッ

本当何か私達にできる事ない？

何が原因かしら？

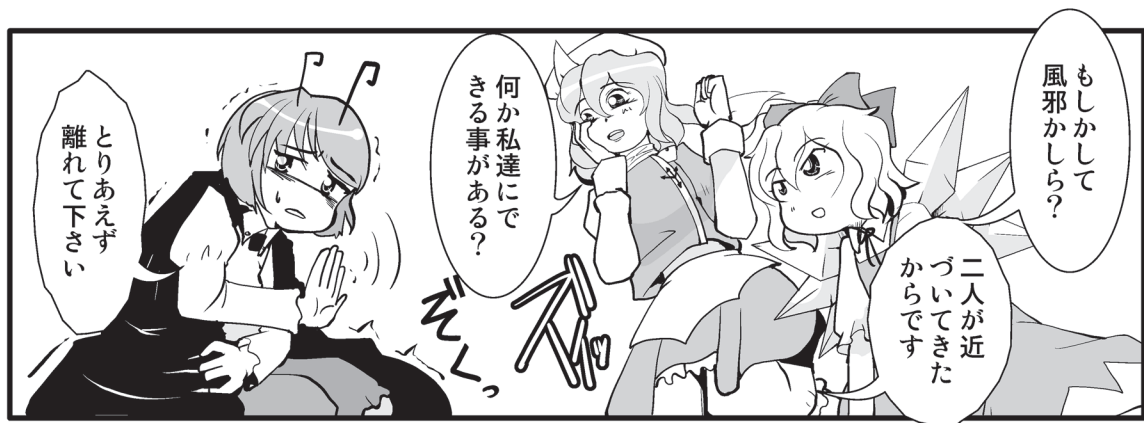
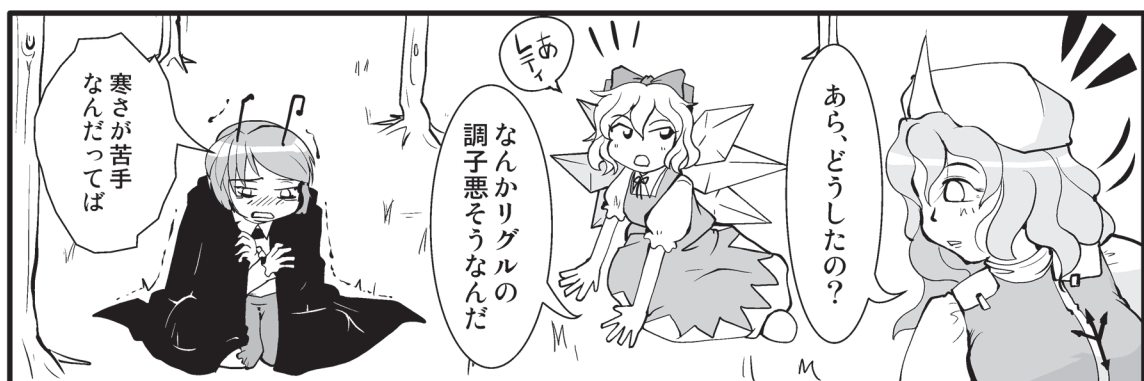
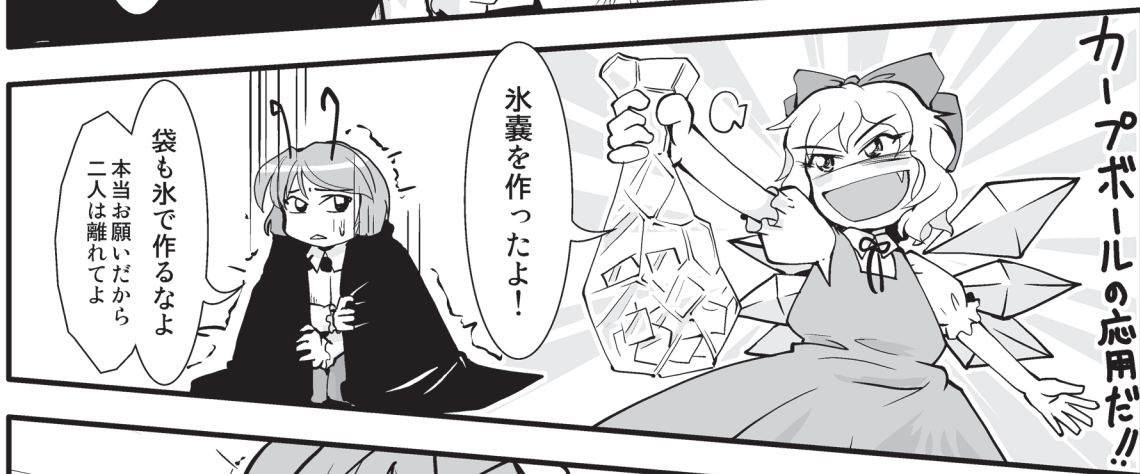
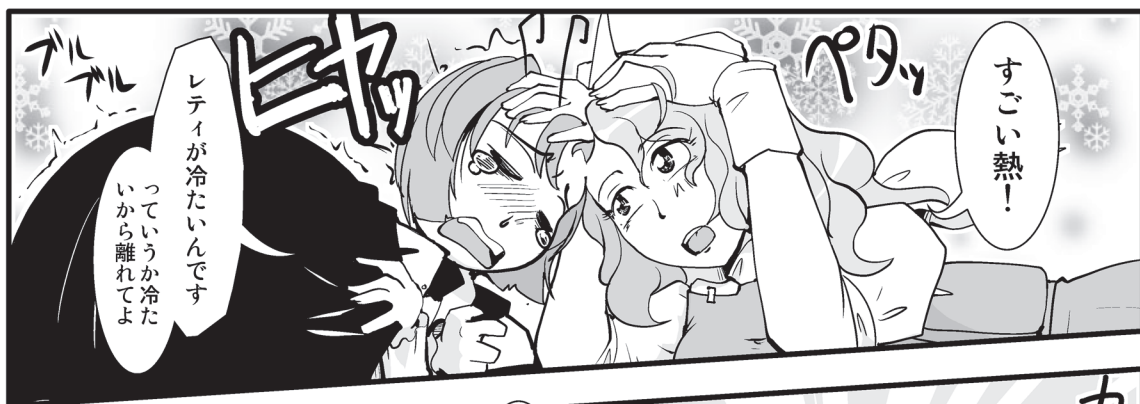
だからあんたらのせいなんだよ！

人の話を聞けよ!!

すごい熱！
パタッ
ヒャッ
レティが冷たいんです
っていうか冷たいから離れてよ
ブルブル

カープボールの応用だ!!
氷嚢を作ったよ！
袋も氷で作るなよ
本当お願いだから二人は離れてよ

ハクション!!

飛距離世界新！
イェェー
逆境で新しい弾幕を開発してたのね！
オォー
ズビ
いいから
お前ら帰れ

蟲カゴ

～ Compensation to fantasy ～

著者：悠奈

～あらすじ～　眠っていたリグルを魔理沙が介抱した。しかし、行動を移さない魔理沙に痺れを切らしたアリスの嫉妬によって一つになる。それを目撃したリグルは自身に眠るミスティアの能力に目覚め、それを駆使してアリスから逃げる。逃げた先には知り合いの風見幽香が居た。

「ん……」

　部屋に一つだけある窓から差し込む暖かな朝日に当てられ、リグルは目覚めた。ゆっくりと眼を開く、頭がまだ起きていないのか、視界がぼやけている。ボーッとした状態で上半身だけ起こし、周りを見渡す。じわじわと思考が回復する。

「あー……？そうか、幽香さんの家で……」

　頭をボリボリと掻きながら周りを見渡す。カーテンは閉めておらず、窓からの光が室内を明るく照らす。

「ん……おはようリグル。」

　ふいにリグルの横から幽香の声がする。リグルが視線をずらし、声のした方を見ると、そこにはシャツがはだけて胸元が見える幽香が居た。

「な、ゆ、幽香さん！何て恰好で何で隣で寝ているんですか！？」

「なんでって……貴女が私を誘ってきたんじゃない？」

「え……？そ、そうですか？」

「そうよ。いやぁそれにしても、昨夜は激しくて私なかなか眠れなかったのよ？」

　リグルの顔が真っ青になる。

「え、な、何を……？私記憶に……？」

「まさか……リグルがあんなにだったとは、思いもしなかったわよ？」

　そう言うと幽香は乱れたシャツを直しながらリグルにウィンクする。

「い、いやぁぁぁぁぁ！」

　リグルは顔を真っ赤にしてシーツを頭から被り、ベッドに突っ伏した。

（寝相のことなんだよね。可愛いから暫くそのままにしておこうかしら）

　幽香はニヤニヤ笑いながらリグルの頭に手を乗せた。

◇

「う、うぅぅ」

　ベッドの上で眼を赤く腫らし、そっぽを向いているリグルの頭を横に座っている幽香が撫でている。

「そんなに拗ねないの。少しからかっただけじゃない」

「だって、だってぇ。私本当に心配で……」

　リグルはそっぽを向いたまま、頬を膨らませて答える。

「だからさっきから謝ってるじゃない。」

　ぐしぐしと頭を撫でる幽香。

「確認しますが、私がただ幽香さんの隣で寝

ていただけで、その……特に危ない事とかはしてないんですよね？」
「ええ、貴女が一人だと寂しいからって枕を抱えて寝ぼけた声で懇願してきただけで、特にあんなことやこんなことはしてないから安心しなさい。」
「そ、そこまで細かく言わなくていいですっ！」
　リグルは耳まで真っ赤にする。
「ふふ、元気でけっこう。そろそろご飯の支度でもしようかしらね。」
　幽香はベッドから立ち上がり、食器棚の前に立つ。
「その間、貴女随分汚れてるから、外にある小川で水浴びでもしてきなさい。」
　そういうと幽香はリグルに向かってタオルを投げる。リグルは咄嗟に投げつけられたタオルに反応できず、顔面でソレを受け止める。
「ふぁぁい」
　モゴモゴとタオルの下で口を動かしてリグルは返事して、タオルを手に取り、外に出ようとする。
「待ちなさい、ついでに汚れた貴女の服も裏で洗って干しておくから、脱いで行きなさい。」
「え、えぇぇ！？脱いでって……そんな」
　リグルが顔を真っ赤にして言う。
「大丈夫よこの辺りに人なんて居ないから。代わりに私のお古でも着なさい。」
　幽香はクローゼットの奥の方からリグルにサイズが合いそうな服を取り出して渡す。
「は、はぁい。」
　リグルは幽香に見られないようにシーツに包まって服を脱ぎ、幽香に渡す。服を受け取ると、服で大事な所を隠して家を出た。
　リグルのいなくなった室内で幽香はリグルの置いて行ったマントを臭う。
「だいぶ汗と土臭いわねぇ。まったく、女の子なんだから少しは気にしなさいよね。」
　幽香は服を持って家の裏へ行った。

◇

「あはっ。つめたーい！」
　山の合間にある花畑の傍に流れる小さな川、その辺りに一人の少女の声が響く。声の主は周りを気にせず一糸纏わぬ姿で水浴びをしている。
「身体洗うのって何日振りだろう……宴会の日は帰ってお風呂に入ろうとしたし、四日前？」
　バシャバシャと音を立てて水を髪や身体にかける。
「むー、それにしても、幽香さんって胸大きいよなぁ……どうやったらあんな大きくなるんだろ。」
　リグルは自身の胸に手を当てて朝見た幽香の胸元を思い出す。
「やっぱり女としては小さすぎるのは……幽香さん程……とは言わないからもうちょっと欲しいかなぁ」
　眉を寄せて自分の胸を見つめるリグル。
「っと。大分経ったし、もしかしたら幽香さんが準備終わって待ってるかもしれない。」
　リグルはプルプルっと頭を振って髪についた水を振り落とし、川辺に置いていたタオルで全身を拭く。そして幽香が渡してくれた服を着る。
「っしょっと……ちょっと大きいけど、着れない事は無いかな。」
　リグルは長い袖を捲り上げ、幽香の家へと戻る。
「ふぅ……なんだか、今まで息を止めていたけど、今やっと吐けた。そんな気分だなぁ。全然落ち着く暇も無かったし……。」
　リグルは立ち止まり空を見上げる。空は青く何処までも澄み渡っていて、今までの事が嘘だったと今にも言われても信じられるような心地よい天気をしている。
　周りを見る。高く誇らしげに立つ山が今いるこの花畑をしっかりと守り、ここは安全だ。と言っているかのように思えた。
　足元を見る。柔らかな土の上にしっかり手入れされた花が根強く咲いている。その付近には多くの虫達が毎日を一生懸命生きている。
　前を見る。どこまでも花畑が広がっている。花の間を人が通る為の道が遠くまで伸びている。何処までも続く道。終わりの見えな

い道が続いている。
(私の……この異変の終わりにちゃんと辿りつけるのだろうか……)
　リグルは手を見つめる。ミスティアの力が流れ、アリスから身を守ってくれた手をギュッと握る。
(いや、出来るかどうかじゃない。やるんだ！私でも、私じゃない誰かでもいい。全てを終わらせて、あの馬鹿馬鹿しい日常をもう一度……)
　リグルは前を向いて幽香の家へ再び足を進めた。
「ただいま戻りました～」
　リグルは扉を開けて中に入る。室内中央の机には既に朝食が用意されていた。幽香はその傍らの椅子に座り、優雅にお茶を飲んでいた。幽香は扉が開いた音を聞くと顔をあげてリグルの方を見る。
「あら、似合ってるじゃない。ちょっと大きいみたいだけど。」
「ありがとうございます。少し大きいですけど、大丈夫です。問題はありません。」
　リグルは扉を閉めて、駆け足で椅子まで移動し座る。
「では、いただきます。」
　リグルと幽香は同時に食べ始める。パンにスープというシンプルな食事だが、リグルは久々に取る食事に喜んでいた。妖怪だから食事を取らなくても簡単に死ぬことは無いが、空腹では力も出ない。リグルはあっと言う間に朝食を平らげた。
「美味しかったです。ごちそうさま～。」
　リグルが完食した時、幽香はまだ半分近くしか食べていなかった。
「リグルちょっと来なさい。」
「？」
　リグルは言われるがままに立ち上がり、幽香の横へ行く。幽香は腰を上げ、リグルの頬についていたパンくずを舌で舐め取る。
「！！？？」
　リグルはいきなり襲った感触に驚き、後退る。
「な、な、な、何をー！？」
「ほっぺたにパンがついて汚れたから取ってあげただけよ？」
「そ、それにしてたって、手で取るとか他にも方法が……何でし、舌で……」
　リグルはその先の言葉を言えず、恥ずかしさで顔を真っ赤にし、うーと呻きながら家を出ていった。その様子を幽香は椅子に座ったままただ見つめていた。
「……流石にちょっとやりすぎたかしら？ま、お昼には戻ってくるでしょう。他に行き場なんてないんだから……」
　幽香は反省の色もなく、笑いながら食事を再開した。

◇

「う～……う～！！」
　幽香の家から少し離れた花畑の中でリグルは三角座りをして鳴いていた。
「幽香さん……なんだか朝から変だぁ……大胆というかなんというか……」
　先ほど幽香に舐められた所を手で触る。まだほんのりと湿っていて生暖かい感触が残っている。それを感じた瞬間リグルは再び顔を真っ赤にして顔を膝の間に埋めた。
「うう～……緊張をほぐそうとしてくれてるのだったらやりすぎだよぉ……」
　ぐりぐりと頭を膝に擦る。暫くして気持ちが落ち着いてきたリグルは顔を上げる。
「はぁ……。皆どうしてるだろ……私だけこんな落ち着いていていいのかな……」
　リグルは花畑の中に大の字になって寝転がる。そして空を眺めながら出会った人たちの事を思い出す。
(妹紅さんはフランドールと戦って生きているのだろうか？美鈴さんはちゃんと逃げ切れたのかな？アリスは未だに私を追ってるのかな？幽香さんは掴みどころが無い人ではあったけど、妙に優しい。もしかして私を騙そうと……いや、幽香さんに限ってそれは無いよね。そして、チルノ……どう、してるのかな？何処にいるんだろう？……考えていても何も始まらないよね。とりあえず、今は何も考えず休もう……)
　リグルは目を瞑り、全身の力を抜き、柔かな土に身を任せる。
(……？なんだろう、あの光。目を瞑ってて

も見える。）
　目を瞑っていて、光を遮断しているはずのリグルの視界の奥に小さな光の球が見える。その球はゆっくりとリグルに向かって近づいてくる。
（！？あれは、み、ミスティア！？）
　光が近づくにつれてその形がはっきりしてくる。その姿は紛れも無くミスティア・ローレライだった。
（み、ミスティア……どういうこと？）
（リグル。私は何時も貴女の中に居るよ。）
　聞きなれたミスティアの声が脳内に響く。その声は耳からではなく、直接頭の中に鳴り響いている、そんな感覚をリグルは覚えた。
（ミスティア……）
（今リグルの意識が限りなく無いに近い、一種のトランス状態なの。だからリグルの意識に干渉が出来る。でも、そう長くは干渉できない。だから聞いて。）
（……）
（私はリグルに吸収された事、間違ってないと思ってる。リグルはきっとなんとかしてくれる。何となくそう思えるんだ。でも……何も知らないチルノが悲しんでる。アノ子に会って、そして、仲直りして協力してほしい。）
（それは、分かってる。でも……！）
（リグル。私がついてる。もう気付いていると思うけど。吸収された魂はその人の無意識の奥深くに存在する。そして、吸収した人の力だけは意識して使える。私の力、使って頑張って欲しい。）
（……）
（もう時間が無い。私の意識がまた貴女の無意識に帰る。目覚めてリグル。貴女の身に何かが起こってる。あと、あの女性は警戒しておいた方がいい……）
　ミスティアの身体から光が削れていき、どんどん小さくなる。
（リグ……私は……いつもいる……れないで）
　ミスティアの光が粉々になって消えた。
「ミスティア！！」
　リグルは声をあげて眼を覚ます。リグルの視界には澄み渡った青い空と雲が映っていた。
「……」
　リグルは上半身を起こして周りを見渡す。そこには先程となんら変わりの無い花畑が風に揺られていた。
「……？ケホッ」
　リグルは口の中に不快感を感じて咳き込む。咳き込んだ時に口内に再び妙な感覚を感じてリグルは顔をしかめる。口を閉じると違和感は収まった。
（何だろ？幽香さんに見てもらおうかな？）
　そう思うと、リグルは立ち上がり、口を閉じたまま幽香の家へと急いだ。
「フフ……」
　リグルが居なくなると、リグルが居た場所に笑い声が響いた。

◇

　リグルは幽香の家の扉をノックする。
「開いてるわよ」
　二、三回鳴らすとすぐに中から幽香の声がした。
「ふふ、やっぱりお昼頃には戻ってくると思ったわ。」
　室内に入ると幽香は中央の椅子でのんびりとお茶を飲んでいた。
「貴女に以前もらった蜜を使ったお茶なんだけど、貴女も飲む？」
「あ、飲みたいです。……って、それより幽香さん！」
　リグルは幽香に歩み寄り、口の症状について説明した。
「ふむ……どれ、お口の中見せてみなさい」
　幽香は立ち上がり、リグルの口を覗く。
「！？これは……いいわ。口を閉じて。」
　険しい表情をする幽香にリグルは問いかける。
「どうですか？何かわかりました？」
「ええ、うーん……リグル、ちょっとごめんね。」
「へっ？」
　リグルが返事をする前にリグルの唇に幽香が唇を重ねる。
「んむっ！？」
　驚き眼を見開くリグル。幽香はリグルが逃げないように頭と顎を押さえ、真剣な表情で

リグルの唇を舌で押し開けてリグルの口内に舌を滑り込ませる。
「ん、んんーっ！」
　リグルは抵抗をするが、ガッチリと頭と顎を固定されていて動けない。幽香の舌がリグルの口内を右に左に動く。
（ん、やだ。変な感じ。何か、変な気分になっちゃう……）
　リグルは抵抗が無駄になる事を察した後、為すがままになる。幽香はある一点で舌を止め、そこで舌を丸めるようにしてリグルの口から舌を引き抜く。
「ぷはぁ……ゆ、幽香さん！いきなり何を！！今度ばかりは怒りますよ！」
　リグルは顔を真っ赤にして腕をブンブン振り回して抗議する。幽香はそれも気にせず自分の口の中で舌を動かす。そして口から何かを手に吐き出す。
「落ち着いてコレを見なさい。」
　幽香の手の平には小指よりも小さな虫が一匹乗っていた。
「……？誰だろうこの子？私も知らないですよ？」
「これが貴女の口の中にいたのよ。貴女も知らないはずよ。コノ子は光の当たらない所にいる毒虫よ。」
　幽香は手の虫を地面に落とすと、それを靴で踏み潰す。プチュッと音がして虫は体液で床を汚した。
「口を開けて光を感知したら光の無い奥に逃げ込もうとしていたみたい。取り除くには口を塞いだ状態で取る必要があったの。だからさっきの方法をとらせてもらったわ。」
「そ、それはわかりましたけど……でも！いきなりはひどいですよぉ！」
　リグルは眼に涙を浮かべて幽香をポカポカ叩く。幽香はリグルの頭をぐしぐしと撫でる。
「悪かったわ。それは謝るわ。でも……」
　幽香が窓の外を睨む。
「問題は、何時の間に私の花畑に侵入し、貴女に虫を入れたかと言う事よ」
　幽香は奥歯を噛み締めて、険しい表情をした。
「フフフ……残念、仕留めれなかったぁ。」
　その様子を見ていた一人の影が悔しがる幽香の姿をあざ笑っていた。

◆

　山奥にある神社、そこで対峙する二つの影があった。
「……私は負けません。神奈子様と諏訪子様に誓いました。この神社を守ると！」
　少女がそう言って、もう一人に腕を突きつける。すると腕の先から濁流が現れてもう一人を包み込む。
「残念！あたいはそう簡単には死なないよ！」
　もう一人の少女が腰に差していた刀を引き抜き、濁流に向かって一振りする。すると刀の通った所の水が裂け、水流の勢いが落ちた。勢いの無くなった水は、その場に留まれず、地面に落ち、土に吸収された。
「ば、馬鹿な……水を切るなんて……貴女みたいな妖精にそんなことが……！」
　少女は再び手をかざす。すると今度は少女の地面の土が持ち上がり、数本の大きな柱となった。それをもう一人の少女に向かって飛ばす。もう一人の少女は前に手を伸ばし、構える。すると目の前に大きな氷の壁が現れ、少女を柱を食い止め、柱をも凍らせて動きを止める。
「くっ！妖精の力が、私の奇跡の力に勝ると言うのですかっ！？」
　少女が構える。すると風が巻き起こり、カマイタチが少女を襲う。少女の前にあった氷は切り裂け、少女の皮膚を風が切る。
「ぐっ！」
　少女は苦痛の表情をする。その隙を逃すまいと少女は再び土から柱を作り、飛ばす。同時に奇跡で水を起こし、少女に向けて放つ。
「私と二柱の神の奇跡に敵う者なんていません！」
　苦痛で顔を歪める少女の様子を見て、勝利を確信する少女。
「教えてあげる。人は油断した時が一番弱いって事をね！」
　少女がそう叫んだ瞬間、ほんの一瞬だけ辺り一帯の空気が凍った。その一瞬だけ時が止

まったかのように土に含まれる水分が凍り、凍った柱は動きが止まった。風は止み、水は凍りつき、少女を攻撃する物は無くなった。少女はその一瞬で少女との距離を詰める。油断していた少女は驚くだけで、何も抵抗する事が出来ない。

「！？」

「だぁぁぁ！」

少女の一振りが少女の腹部を切り裂く。少女の腹部から赤く鮮明な血が飛び、地面を赤く染める。臓器から逆流した血が口から吹き出す。

「ごふっ」

身体を支える力を失い膝をつく少女。空気の緊張も取れ、風は再び吹き始めたが、主の居なくなった風は爽やかな風に戻り、土の柱は崩れ落ちて普通の土に戻り、水は弾けて水玉になって飛び散り、辺りに降り注いだ。

「流石、斬れない物があんまり無いと銘打たれた刀。異変で少し弱くなってても、いい切れ味ね。」

少女は赤く染まった刀身を見つめて言う。

「そ、そんな……私やお二人の奇跡が……ごめんなさい。神奈子さま、諏訪子さま……私……守れ……でした。」

少女は血の溢れる腹部を押さえながら地面に倒れた。数秒後、少女の身体は三つの光の球となり、少女の身体に吸い寄せられていった。

「どうやらそっちも終わったみたいね。」

先程の少女とは違う女性の声が少女の後方からする。少女は声の主の方を振り返り頷く。

「こっちもあらかた片付いたわ。向こうでルーミアが待ってるわ。」

そう言うと女性はは踵を返して歩き始める。一人残された少女は先程の女性の消えた方向へ歩き始める。

「……あたいは、もっと強くなる。そして、異変を起こした犯人をぶったたいて、みすちーの敵を打つんだ！」

少女の呟きは誰も居なくなった神社の境内に響いた。

（つづく）

〈作者コメント〉

幽リグはまいじゃすてぃす。

給餌

著者：くろと

妖怪とは、こうも可愛らしいのですね。それともリグルが珍しいだけでしょうか、だとしたら私は幸せかもしれません。いえ、とても幸せです。そうやって私は自分自身に言い聞かせて事態の成り行きを納得させるのです。というのも私はこれより彼女に喰われてしまうから、不幸な心持ちで三途の河川を渡りたくはありません。さてリグル、先ずは大口を開けて私の左腕に噛み付きました。その尖った歯が皮膚を突き破り、筋肉に食い込み、ついには骨まで達します。左腕に走った鈍痛に私は眉根を詰めて、それでも無理に笑顔を作ってみます。すると左腕から真っ赤な鮮血が飛沫になって、リグルの整った顔を汚してしまいました。されど彼女、私の左腕を食べるに夢中でそれに気付いておりません。まったく仕方がないので私は動かせる右手でポケットから白いハンカチを取り出し、血で汚れた部分を拭き取ったのです。それでも彼女の歯が肉に食い込むたびに血は躍り出て、幾度も彼女の顔を汚してしまうのです。二、三度拭き取ったハンカチはすでに赤く染め上がり、これでは血汚れを延ばしてしまうだけです。私は困り果てました。でもその心配も長くは続きません、リグルが左腕を食べ終えたからです。左肩から先が綺麗になくなり、噴出す出血は止まりました。大量出血のせいか呼吸荒く、瞳の焦点が薄れ、意識が遠のいていくのを緩やかに感じています、痛覚はありません。リグルは続いて脇腹を喰らおうとし、ガッという高音、肋骨に前歯を当てていました。リグルは上半身が跳ね上がり、口を手で蔽います。私は、その様をクスクスと笑ってしまいました。そうするとリグルはムッとした表情で私を見て、それから眉尻を少し下げて、喋りだしたのです。『アンタ、自分が喰われてるのにどうして笑ってるの？』あまりに当然の疑問を投げかけられて、私は驚きに目を見張ります。まさか妖怪がそのような機微を気にするとは思わなかったからです。私は逡巡し、それから開口しました。しかし咽喉から吐き出る台詞は大量の出血を伴い、大変に聞き取り辛い雑音であり、ほんの少しだけ自分が恥ずかしくなりました。それでも何とか声帯を震わして、聞き取れる発声に成功したのです。『――笑い方を忘れて、怒り方を忘れて、泣き方を忘れて、楽しみ方を忘れて、そうすると誰からも忘れられて、だから、死ぬときぐらいは笑顔で逝こうと決めて……』そうして言葉を紡ぐ間にも意識は掠れ、視界は明瞭を失い、心とやらが体から離れていくのが分かります。私の話を大人しく聞いていたリグルはふぅん、と訝しげな表情を作る。それから『変な人間。でも肉は美味しいよ』と八重歯を剥き出しにした満面の笑み。彼女の笑顔はとても可愛らしく、つられて私も破顔します。話し終えるとリグルは食事を再開し、私の脇腹を抉るように歯を立て、喰らうのです。けれど痛覚はとっくに機能していないので、そこまでの苦痛は感じておりません。目の前では夏の新緑のような髪がリズムよく揺れています。所々は私の血で赤く染まり、秋に眺めた紅葉のようでもあり、私の目を楽しませてくれました。そのお礼にと、いまだ動かせる右手で彼女の頭を撫でたのです。するとリグル、視線だけで私を見上げて、ムズ痒そうな表情をしています。私は、ごめんなさい。と謝り、それでも頭を撫でる行為をやめませんでした。結局リグルは根負けしたのか、頭を撫でられる行為を許容したのです。私が、いい子ね。と口癖のように呟くと、齧りという異音を耳にしました。見ればリグルが私の人差し指と中指を食んでおり、モゴモゴと咀嚼しているのです。それが乳児を彷彿とさせるように愛らしく、私は再び目元を綻ばせて、つい『美味し

い？』と聞いたのです。リグルは咀嚼を止めず、首の素振りで返事をしました。どうやら美味しいようで私はホッと肩を撫で下ろしました。そして私は息を引き取る間際、彼女の額にキスをしたのです。

「わたし、あなたにであえて――」

（終）

〈作者コメント〉

※コメントはありません

冬コミ告知
2010

東

どうも東です。この月刊ナイトバグでイベント告知

するのは何気に一年ぶりだったりしますねw

というわけで、年末の大イベント、冬コミに

サークル参加します！

配置は 木曜日 東地区R－58b【海亀】

新刊は

りぐるきゅんRX　28P　400円

内容は一年前に出したりぐるきゅんDXと似たような

感じですかね、リグルの他、文と紫がメインです

冬コミ参加される方いたら、ビッグサイトで僕と握手！

今回は何サークルくらい

あるかなぁ・・・

↓次ページはあまりあてにならないサンプルです

力ずくで確かめるのみ！

りぐるきゅん

RX

貴様らに名乗る名前はないっ！

キーン

せまっ！

光と闇の果てしないバトルとかはあんまりない！

漫画・自由作品、表1～表4　作者コメント

クリグルスマス
言示弄　p2

ツリーを押入れから出すのが面倒な方はご利用ください。

冬コミ告知２０１０
東　47p～49p

何気に一年ぶりのイベント告知だったりしますね、冬コミで僕と握手！きっとリグル本もたくさん手に入る、はず…

無題
草加あおい　12p～15p

去年はチルノと幽香さんだったので今年は慧音と妹紅で。
冬コミに２日目U-31a「七輪大社」で参加します。リグルさんはおまけマンガに出る程度ですが、宜しければお立ち寄りくださいませ。

へー　私と勝負するんだ
黒ストスキー　51p

あまりに今更ですが、うどんげっしょー版リグルが可愛くて仕方ありません。今回のイラストなんかは髪型にモロに影響が出てます

アルゴリグル
13　16p

サンタさん出てこいよ！
プレゼント配ってるだけじゃねーか！
そういうイベントじゃねーからこれ！

表紙
小崎

風邪、腰からくる人はドドメ色の便座。

みんなのX-MASよ
ADDA　17p～19p

お風呂の事がこの４コマの存在意義だったと思います。（笑）
ところで日本語fontを探すことが難しかったんです。
わたし外国人なのでせりふを入れる事がいちばん大変でした。
日本語が下手ので理解できないことがあってもご了解願います。

クリスマスお空
キッカ　20p～21p

お空が描きたいなぁと思ってたらこうなりました。
アリスさんは何やってはるんですか。

東方茶湾虫
クロツク　22p～24p

冬コミ新刊にてちょろっとリグル描いてます。
お暇でしたら東Ｖ０４aにどうぞー。今回は草加あおいさんに御助言いただきました！ありがとうございました！

東方大寒波
Step　37p～38p

テーマは越冬です！　……ってつまり先月に間に合わなかった原稿なんです、まぁ、ネタかぶり回避できたから良しと思ってください。あと４コママンガ難しい……

NEXT▸ 次号2月号は1月22日(土)発行予定！

※次号の投稿締切は1月15日(土)です。
皆様からの投稿をお待ちしています。

月刊NIGHTBUG 2011年1月号

2010年12月23日発行
企画・編集：神楽丼／小崎

原作　上海アリス幻樂団
東方projectリグル・ナイトバグファン企画
web配布／自由投稿参加型月刊誌

くろと
悠奈
黒ストスキー
Step
Salka
IDEA(GAGrim)
でかすだちん
やにたま
貴キ
蛍光流動
言示弄
残虐非道の貴公子
怒羅悪
斑
13
ADDA
キッカ
クロツク
草加あおい
東
小崎